

おもたれ
(昭和六〇年度放送文学賞受賞作)

沢瀉の紋章の影に

(第二回)

吉田 紗美子

二

羽檄馳る

一

それから十余年後には「藩」そのものがなくなり、体制の瓦解するときの早さをおもわせるのであったが、その安政五年、正月はことに藩の行事は多い。

正月御目見、お船手お乗初、お謡初、寺社御目見、御斧初、お射初、お打初、学館(藩校)開、御具足祝、庄屋御目見……と、正月十二日まででも連日といていいほど行事がある。

それがすべて終わってから、半九郎の喪があけた児玉家では、次郎彦とひさの婚礼を行った。次郎彦十九才、ひさ十八才。盃事がすみ、塩川老人の謡の声がながれると、土塀の外に群がっていた見物の者は歓声をあげて瓦片や土塊をいっせいに庭に投げこんだ。多くの子宝に恵まれるように、とあたらしい夫婦を祝福するのであった。

翌朝、徳山の山野は銀世界と化していた。早曉におきた次郎彦は井戸傍で、水をあびたのち木刀の素振りをくりかえした。座敷にもどり、机に向かつて墨をすった彼は、姿勢を正してみると白一色の庭に向いていた。手をふればひさは子を成す。子を成せば、子への愛にひかされて筋道をふみ外すやもしれぬ、父栄三郎が二十九才で直面した決断を十九才の彼が迫られようとしているのであった。

雪は断続的に烈しさを加えた。一羽の雀が南天の細い枝を顫わせながら、赤い実を啄んだり躑つたにはとんで水を含んだりしている。動くものはその雑色の雀ばかり、雪はしんしんと重量感をまじつて庭木や灯籠を埋めてふり注ぐ。次郎彦は、重い、重いとそれをみつめている。突然、どすつ、と、鈍い響きが裏の竹藪のあたりで起こった。撓たがっていた竹がついに弾いて積った雪の塊りを払いおとしたのであろう。それは、一種の気合いであった。筆をとった次郎彦はもうためらわず、一気に屈を書きあげた。

兒玉次郎彦改め、次郎左衛門とひさとの結婚届である。そして彼はそこに、百合若改め健を、彼ら夫婦の養子に直す旨をも書き添えた。「百合若こそ兒玉家の主」「百合若こそすべて」との、もとやひさ、亡き半九郎まで含めた兒玉家の切望を尊重し、いつか生まれるであろう我が子を健の影の存在においていたのである。

彼は性急に二度も、ひさを呼んだ。

今朝からは髪形もかえ鉄漿かもつけた新妻のひさは、しずかに障子を閉めてから、墨色も乾かない屈をうけとった。雪の中で働いていたのか、両手が赤い。昨日までと変わらぬ紺地の着物、ただ、次郎彦がこの家に入ったころはむしろ稚さを浮き上がらせていた裏地の赤が、いまのひさにはもっと華やかな色があればその方がふさわしく見えるほどになっている。

一読して、口の重い彼女がしきりに感謝の言葉を探す気配に、次郎彦は精一杯の拙い冗談を口にした。

「ひさどの、また赤飯じゃ」

「は……」

「婚礼の翌日、男子出生では、ちと早かったかのう」

機転の利く彼女も、この言葉にさすがに羞じらいをみせて、ようやく答えた。

「わたくし……子持ちで嫁にしていたのだいようで、外聞が悪うございます」

ひさは、この願いを一度も口にしたことがなかった。笑顔をみせたあと、急に臉を赤くして急いで去っていった台所の方から、今のやりとりを話したのか、家族の笑い声がきこえてきた。

「兄さま、いや、父上かのう、ごほんじゃと姉さまがいうておられる」

朝食を告げに来た健も笑っていった。

健は藩校に通うようになり、勉学は第一等の成績ながら、相かわらず七才とはみえぬ小柄であった。細い首、狭い肩巾、長い睫毛の下の繊細な感情を湛えた瞳。彼がやがて元服し、もとやひさの大きすぎる期待をずっしり担いつつ、騒然の度合を深めるこの世相を生きてゆくのである。

ともあれ、自分が児玉家へ入った意味は果された。次郎彦はそれをおもいながら、健のさしだす江村彦之進の手紙を披いた。安積塾で塾長となった彦之進は、この年、二十九才。

ハルリスは昨年暮れ、ついに条約締結に漕ぎつけ、三百五十名の大行列を任立てて將軍に謁見した。

江戸城へむかうビイドロのはまった特註の大駕籠をみようとする沿道の大群衆は約十八万四千人、そのなかに彦之進も、折柄参府中の、のちに政敵となる富山用人の妹婿・熊谷志津美しづみも梅地央あきもいる。

ハルリスは「梨の実の腐爛したような」体臭をもつ、という。ビイドロの窓をのぞく彦之進は、ただ一人異国にとどまって君命を辱めなかったハルリスは豪傑の士、愉快な奴じゃと共感したが、それにひきかえ謁見を強要され、しかも席上、三汗九菜の最高礼の馳走をもてなす幕府はなんたる腰抜け、これを皮切りにやがて世界の夷人ども交替にわが邦を訪れ、国の膏油を吸尽してゆくであろう、と条約の行末をみている。

貿易章程十四款からなる日米和親条約は、老中連署してあとは勅許を俟つばかり、京へ上った堀田老中は勅許をうるためありとあらゆる手段の働きかけを開始している。

勅許は出るか。夷人の強請に屈して「開国」となるのか。日本中が息をつめて見守る安政五年の幕開けであった。

二

連打。

鼓手が腰に吊した洋鼓を両手にもった撥で目にもとまらぬ早さで叩く。遠雷のような余韻が消えて一呼吸ののち、ぼん、ぼん、ぼんと、軽快な行進曲がはじまり、同時に兵たちが機械人形のように歩きだす。道を隔てたむかいの福間式部邸の裏庭で、うきうきしたその曲が鳴りだすと、健はじっとしていられず駆けだしていった。

相州撤兵成って支藩の兵のみ引きあげと決り、この春帰国した兼崎昌司が、林芳雲の反対によって馬場を使うことができず、やむなく福間邸のひろい裏庭で洋式練兵をはじめたのだった。

健にとって、昌司の携えている品はみな物珍しかった。見たこともない分厚な紙に、竹の先で尖らせた筆で書いた「曲譜」、おたまじゃくしが寄ったり散らばったりしているのがそのまま音楽になることさえ、おどろきであった。また革表紙のついた、びっしり横文字のつまった手帳。

V L A G フラフ 軍旗

P A A R D バルト 馬

S O L D A A T ゴルダート 兵

といった工合である。

丸顔の、どうみても風采の揚がらない昌司はあかす練兵を眺める健に、いった。

「健どのはそんなに練兵が面白いか」

「うん。母様は洋鼓の音がやかましいというが、わしは行進の曲が一番好きじゃ」

「もう十年もすれば、日本中、洋式練兵となる。相州では来原良蔵という宗藩のお方が桶を叩いて曲譜の練習をなされたとき、人は気がふれた、というたものじゃ。一步先んずる人はえらいといわれる。それに反し、十年先んじる人は気狂い扱いされるものじゃ」

昌司はそう言って、今でいう「憂鬱」といった表情になって健を見下ろした。

五年前ほんのすこし帰国したほかは、ほぼ二十年間も藩を留守にしていた彼は、徳山へかえてまだ四カ月にしかならぬのに、帰るべきではなかったと後悔していた。それほど、林芳雲ら軍学者の嫉視反目はひどく、また徳山の人々の新奇なものに対する目は冷やかなのであった。

夕食のあと、奥の北側の涼しい縁側で、もとは団扇を使いながら、健にいった。

「母様はやはり、鉄砲をもって衆をたのんで戦うのは足軽の兵法とおもえてならぬ。お前は名譽ある馬廻役の子ゆえ、いずれ元服したら、林芳雲どこの指揮なさる北越流の整修陣に入ることになるのですぞ」

「もうそんな、名乗りをあげて一騎討ちするような絵双紙の時代ではない。これからは集団の戦い、戦の鍵は兵の動きじゃ。今日も兵がわしの号令で手足のように動いた」

「ほんとう……健の号令で大人が動いたっていうの」

のぶはひやかすように笑った。

「ほんとだとも。わしは体は小さいが、指揮はとれる。今に千も二千もの、いや、一万二万の大軍でも手足のように動かしてみせるぞ」

山野を埋める方という大軍が鯨波の声をあげて敵に襲いかかるのをみるように、健は熱っぽい目をしていった。のちに元服して児玉源太郎、日露戦争では総参謀長として日本帝国の存亡を賭けた二十五万の兵を動かし、三十五万のロシア軍と満洲の曠野に会戦する健であったが、いまの幼いあたまでは、一万二万の数が無限大なのである。

「でも、そうするには、サンペイタコチキという本をよまねばならんのじゃそうな」

七才の子供にかえてちょっと困ったように告げる健が可愛いくて、皆は笑いさざめいた。

繕い物をしていたひさも微笑した。笑ったのちなぜとなく簾越しにみえる表の方をふりかえてみた。表座敷に灯りはなかった。また次郎彦は外出したのかとおもったが、目を凝らすと、縁側にゆるい縞を描いて蚊遣の煙が這っている。ひさは不審げにたちあがった。

廊下のつきあたりの暗がり、いきなり肩を掴まれた。立ちほだかって待ち構えていたらしく、次郎彦は声をひそめて囁いた。

「客がいる。健をこちらへよこすな」

「はい」

「あとで湯漬けを食わしてやってくれ」

氣をのまれて無言でうなずくと、次郎彦はふだんとは別人のような敏捷さで襖の向こうに消えた。

松蔵にきくと、宵の内に佳蔵と唯一とが若い客を案内してきたとのことであった。近頃はこんなふうに関密かに宗藩の若者が訪れてくるが多くなった。格子門まで閉して他聞を憚かる気配に、ひさもなにもなかったように裏座敷へひきかえし、家族の寝静まるのを待った。

一刻がすぎた。

湯漬けの用意を終わったところから、夜が更けたせい、客の声はしだいに透るようになって、しきりに「兵庫警衛」の言葉も交った。

「今年はじめ、幕府はあらたに兵庫警衛を申しつけてきた。相州は条約の締結により警衛の意義は半減したが、幕府は今もって、後任の強力な大名がいらないとの理由で全面的にその任をとかず、そのうえ兵庫を警衛するとなれば、いかな長州でも負担能力がない。辞退すべきだとの論が圧倒的だったが、結局のところ兵庫は王城の門地、朝廷の攘夷のご意向に副うためにも、

ここは枉げて出兵すべきとの論が優先した」

「では、宗藩は兵を出す、と」

「出す。大坂蔵邸ではすでに銀子の調達をはじめた」

「となれば、徳山もまた出兵か」

「だが、問題があるにはある。兵庫あたりは公地私地入りくんで、兵を收容する陣屋の敷地の確保もままならぬ。兵庫岬か芦屋の打出浜か、そのあたりで……」

長州訛りのほとんどない客の声は独特の抑揚をもち、能弁でもないのに真情溢れて、ふしぎと聞く者を魅了する感情ゆたかな声である。表座敷のしんとした気配は、次郎彦はもとより、佳蔵も唯一もこの客に傾倒しているからであろう。雑談に入ったのか客が愉快そうに笑ったとき、聞き惚れていたひさも誘われて微笑していた。

次郎彦が手を叩いた。湯漬けの盆を運んでゆくと、自分でうけとりにきて、すぐまた襖を閉じた。ひさはしずかに退ってゆきながらも、そのとき激して高くなった客の声を耳に捉えていた。

「もはや君、荏苒、時を待っている場合ではない。大老の専横に先生は赫怒しておられる。尾張、水戸、越前、薩摩らの志士が呼応して大老を誅すというに、長州に志士はなきや、と。十一月初旬……」

そこで客の声はいちだんと低くなった。

ひさは、胸を槌で叩かれたような不安をおぼえた。

台所の板の間に坐ってどのくらいすぎたのか、唸りをあげて襲ってくる藪蚊に、ひさは起って裏庭に出てみた。淡い夏の月が、地面に樹々の影を落している。その斑をふみながら、納屋の軒下にならべた筵の梅の実をみてまわっていると、目の隅を掠めてすばやくながか走った。影も残さず裏庭を横切った生き物は竹藪に跳んだ。柔らかい蹠がふりつもった竹落葉をふんで竹幹の間を駆けまわっているのか、二、三本づつ竹の梢が小刻みに顫えたとおもうと、やがて、灰青色の夜空から音もなく枯葉が舞ってきた。人の寝静まった真夏の夜に、番の二匹が重なりあい離れあいして、ひろい竹林を我物顔に戯れているので

あつた。

井伊大老が勅許もまたず無断で条約に調印し、朝廷はご震怒あそばされ、それをきいてこの防長全土も沸きかえっている。表座敷では次郎彦たちの議論の声がたえなくなった。

ひさは頭上に重たいほど鏝められている星の群を、不安そうにみあげた。まだ形にならないけれど、どこかで地鳴りの響きがある。いつか次郎彦はこの家から出てゆくだろう、との予感が芽生えていたが、次郎彦を連れてゆくのは、「寺島忠三郎であります」「入江九一と申す者」など、はっきり名乗ってやってきた宗藩の若者でなく、今夜ひそかに訪れたあの声の美しい若者なのだ、とひさは直感した。彼が一声呼べば次郎彦はすべてを擲って欣然とついてゆくだろう。一つの星が動いた。すると星の群はいっせいなだれ、ついには轟々と音をたてて奔流するようにひさにはみえた。

客は去る気配であつた。

衝立の陰から声だけ送ると、すでに草鞋をつけた客は、

「いづれ改めて名乗る折もあります。今夜はこれにて」
折り目正しい挨拶をのこした。

格子門をひそやかに引き、四人の足音はひたひたと揃って砂地の道を遠去かってゆく。

寝所にひきとつたひさは、今夜も次郎彦はかえらなないと知っていたが、帯だけ解いて蚊帳をくぐった。

三

次郎彦と佳蔵、唯一の三人は、しきりに往来するようになった。

久坂の急飛が来次第、すぐにも脱藩して京での十一月決起に参加しようというのであつた。

また別に、同志たちの会合もある。

昨夜、皆は本城清邸に集まった。

兄・安之丞、岩崎謙、吉弘新九郎、光井左馬丞、信田作太夫らのいつもの顔ぶれが集まったところで、

「今夜、諸君に集まってもらったのは、この吉報を、一刻も早くつたえたかったためであります」

清はそういつて物静かな表情で皆をみた。

父の病のため急ぎ安積塾から帰国し、死後は江戸にもどらず藩校の訓導となった彼は、この年三十八才、次の徳山藩を担う人物と誰もが認めて、彼はしぜんに同志の中心人物となっている。

「去る八月初め、萩の宗藩に朝廷からひそかに密勅がくだされていた由であります。さすが朝廷も、井伊大老の専横を憎まれたのであります。」

「靄然接人」と評される清は、言葉も態度もじつに物優しい。このしらせにどよめいた皆を、彼は微笑を含んだ眼差しで眺めた。

大老は、天下にみちみちている大老弾劾の声をもとめせず、今年はじめアメリカと通商条約を結んで朝廷を御震怒させたが、さらにイギリス、フランス、オランダ、ロシアの四国にも通商内諾をあたえた。内政面でも、將軍継嗣問題については、一橋家の慶喜を、とする衆望を無視してまだ幼い紀州家の慶福を推し、この問題に絡んで違勅調印をなじってやまない水戸家を「懲罰」するという専横ぶりなのである。

「水戸を叩けば朝廷は猫のようになると大老は読んだのでしようが、逆の結果になりました」

密勅は、大老の独走をなすなく拱手して見ていた心ある士を鼓舞するもの、禁裡そのものでも、これまで大老の代弁者だった九条閑白が、攘夷派の若手公卿九十人の排斥をうけて閑白職を辞任する、という噂が立っている有様だった。

この秋、ついに天下の状勢は大きく動こうとしている。

本城邸を出たのは暁、次郎彦は暗い夜明けの道を横本丁、とむかいながら、露湿りした道の気配も、暁にかわる空の色も、

すでに秋を告げていて、日、一日と十一月は近くなると昂揚した気分である。

次郎彦の耳には、「「裏」面り説かれると誰しも感奮する」といわれる久坂玄瑞のあの夏の夜の美声が、今もきこえていた。あの夜、彼は、たがいに錯綜し関連しつつ国を傾けてゆくこの安政五年の江戸の状況を、次郎彦たちが仄聞していたのとは比較にならぬほどなまなましい熱気をもって精細に語り、やがて十一月決起を懲懲して、その滔々たる弁を簡潔にしめくくった。「もはや理屈もいらぬ、名もいらぬ。ただ大老の専横に赫怒して起つのみ。君、尊王といい攘夷といい、いずれを奉ずるにせよ、信ずるとはすなわち行動することではないか。今の世に足らざるもの、それは果断である」と。

彼をのせた千吉の小舟が波間に去ってゆくのをみながら、次郎彦たち三人は沸きたつような興奮にかられていた。満天に星は声をあげてどよめき、暗い海は彼方から騒然たるうねりを送ってきていた。空も海も、この鈍感で矮小な徳山の天地さえ、久坂の通過したあとでは声をかぎりに次郎彦たち草莽の崛起を促そうとする。

久坂は次郎彦と並んでもひけをとらぬほど堂々とした美丈夫で、年令もほぼ同じ、しかし昂揚した美しい魂の持主で、一言半句が黄金無垢のように純粹で、真摯で、それでいて言動が華やかであった。

その防長第一の人材、「南山の竹」——それに翹しそれに鏃せばそれ或いは石を貫く者の子なり——と、誰もが至囑する久坂玄瑞が、他の誰でもなく次郎彦その人をめざして徳山を訪れ、同志として決起を懲懲する。士は己を知る者のために死す、という。久坂の知遇に報いるに、身を惜しまず必えようとする次郎彦であった。

掃宅した彼はすぐに筆をとった。

当年黒氣侵_レ辺陲_一 天下無_レ端羽檄_馳

只為_レ士風掃_レ蕞_靡 終_レ蕞_帝德漸_レ陵夷_一

丈夫酬_レ国心_断 寸刃斃_レ姦毫_不疑

今日海隅兵馬足_一 從_レ茲_不使_レ妖夷_窺

近頃、政治の弊害はすみずみまで蔓り、鳥の羽をつけた火急の檄は天下に駆けめぐっている。政道の弛みは帝徳の陵夷（丘

が平らになる様)を招いて、丈夫たる者は決断の時を迎えた。寸刃を以ってしても姦を倒すことはできよう、久しく泰平であったから兵馬を調えるにかたくない、志気を奮いたたせ、妖夷がわが邦を窺うのを制しなくてはならぬ。

そんな使命感を述べた所感であった。

春の夜のおぼろおぼろと行月の

光りや遠く照わたるらむ

午前の教場で、林芳雲はうんざりしたように、ええっ、と咳払いすると、井上唯一の色白の顔を淡い鳶色の瞳でみていった。

「もうよい、春の夜のおぼろ、ではなく、春の夜のおぼろおぼろと行く月の、じゃ。もっと心して詠めぬものかのう。それでは、折角の秀歌も唐人の寝言じゃ」

「はあ。古人の作にしては拙い歌であります。いったい、誰の作でありましょうか」

唯一の負け惜しみに、教場に失笑の渦がまいた。

「なんということを。それは、そなたの兄上の歌ではないか」

唯一の兄、敏雄は、佐々木家に入って桐園と号し、防長にきこえた歌人なのである。だが、安之丞の弟子として長槍をふるまわずだけで唯一は文学的気配もない。辞世がよめればそれでよい、春の夜がどっちむこうとおれの知ったことか、と唯一は平然といった。

「あ、そうでありましたか。わたくしはまた、先生は時に自分の歌を披露されますから、内心、林先生の歌ではないかとおもうりました」

その言葉に、教場中、肩をゆすって大笑いとなった。

そのときである、だれた教場の空気を引き裂いて、ごおっと砲声が走った。澄んだ大気を震わせて、もう一発、二発。遠石の浜辺で兼崎昌司が大砲の試射を行っているのであった。射程がどうの、命中率がどうの、近く御前発射もあるそうなの、といにせいに私語が湧き、芳雲が机を叩いてたしなめてもその効果もなかった。

しばらくののち、芳雲は人気のない教場を見廻して咳払いを一つした。だが、その咳払いも、以前のように勢良くも疍走ってもいなかった。学者はその学を政治に生かしてこそ政学一致であるが、君側を遠去けられて久しい今は書生に知識を伝受するだけに甘んじなくてはならぬ。そのうえ、蘭学と鳴り物入りの洋式練兵が彼の座を脅かそうとする。

「死馬の骨など買う者はおらぬ、というのか」

芳雲の独白を受けとめるように、彼の前に端然とすわった大きな影があった。浅見栄三郎である。栄三郎はがらんとした教場に目をやり、

「このところ書生たちは浮き足だって、真面目に学ぶのを忘れておりますな」

と云ってから、芳雲の息子の様子をたずねた。近頃変わった様子はないか、というのである。芳雲は、母親似の鳩のように純真な眼をした息子をおもいうかべて、

「さて。うちの倅が、なにか」

「いや、何と申して……、ただ、このところ、兎玉へゆきましたる嚴之丞の様子が只事でないようにおもわれ、もしか同心の動きをしているのではないか、と」

親の眼からすれば、次郎彦や佳蔵たちの動きが尋常でないのは一目で知れる。

それをじゅんじゅんと述べたい栄三郎であったが、芳雲の疍走った驚色の瞳が性急に結論を促しているのに気付くと、根拠があるわけがなし……と、口を噤んでしまった。当の芳雲は、自分の淡い色の瞳の動きが開かすべき口も封じてしまうと、むろん思いもよらず、いつもながらこの御仁の持つて廻った表現には困惑の他ない、と、

「そういえば、夜な夜な、会合と称して不在でありますな。それが、なにか」

「いや、私の杞憂でありましょう。昔から殿ご在邑の年は事が多いとされたものでありますゆえ、この時世でもあり、若者の暴走が懸念されました。つまらぬことをお耳に入れたようであります」

栄三郎が去り、おかれて秋の陽射のなかに歩み出た芳雲は、いまの会話をきれいに忘れ去っていた。堅登の広場をかこむ両

側の樹立には、銀杏の大樹が黄葉をはじめ、緑金の焰の形をして聳えていた。みれば蔵本の門わきの楓の古木にも、爪紅を点じたような早い紅葉の一枚があり、もう秋を告げている。

半九郎が逝いたのはこの楓がさかんな篝火ほど紅葉したころであった、と芳雲は足をとめて見上げた。宗藩が兵庫出兵仰せつけられた以上、この徳山もいざれ出兵とあって、東評定役がいそぎ銀策に上坂していったこの状況はまさに相州警衛のあの年と同じ、半九郎在りせばなんというであろうか。

だが、あの時は誰しも「この徳山の立つように」と念じてそのための激論も憚らなかつたが、いまの富山用人らの政府はただ保身のために宗藩に追随しようとする。

必要とあれば連枝を落して幹を守るのは歴史の教えるところというのに、いまの徳山はあの取り潰しの折、江戸城辰ノ口評定所からだだちに出羽・新庄藩送りとなつた殿の御無念も、この城下が一夜にして瓦礫の野と化した家中の無念も、さらには再興なつた後も長く宗藩の目付家老を戴かなくてはならなかつた屈辱も、すべて忘れ去つた如くである。

支藩は、宗藩に反抗しても立たず、追隨しても立たず、振り子がどちらへゆれてもならぬ。それが長い宗支の歴史に得た生きざまのほずであったのに、富山用人は宗藩に膝を屈してみずから宗藩の走狗となつた。これで徳山はどうなるか。半九郎在りせば、何と言うか。

半九郎と期した藩政はまだ改革ならない。

自分は老いて無力、後生を恃むよりほかないのか、と芳雲は淋しい顔になると、緑の天蓋のような楓の下をはなれた。

四

「次郎彦どの」、祖母がにこにこと呼びとめた。次郎彦も微笑して掌にのるほど小さくて愛らしい祖母を見下ろすと、

「そんなに急いで……今夜も、夜遊びでありますな」

「夜遊び……滅相な。全くもってそんな」

「いいえ、政治に血道をあげるのも男の夜遊び、何事もほどほどがよろしうあります」

「ううん……ですが、鉄は熱いうちに打てとも申すではありませんか」

「ほ、ほ。これは一本取られました。そのうちこの呆けた頭になにか浮かんできたら、お返しとゆきましよう。お早うおかえり」

このところ寝所によりつきもせず外泊ばかりする次郎彦に、齒の欠けた口をすばめて祖母はやんわり釘をさした。外に出ると、塀に凭れて待っていた唯一が「来たか」とたずねた。次郎彦は首をふった。

「久坂の連絡はおそいのう。おれはもう身辺を整理したから、連絡ありしだい脱藩できる。もし企てが破れ、久坂が黒竜江の奥まで探索にゆくというのなら、おれもゆく」

唯一の声がいつもに似ず小声なのが、彼の決意の固さを示している。兄・左織の「厄介」になる彼は、立てるべき家も養うべき家族もたない。着替えの紺もたない。夜気のなかで唯一の着物の汗臭さを嗅ぎながら、次郎彦は眩しいものと連れだっている気分であった。

浅見家では、本城清をはじめいつもの顔ぶれが、兼崎昌司を囲んでいた。

風采の揚がらない村夫子然とした昌司は、掌に煙草の火玉をころがして煙管を吸いつけながら、相州駐屯している間に児玉半九郎がゆき、「五年前をおもえば今浦島に似た心持であります」と述懐した。

「さよう、あのころは詩を作り絵をそえ、今からすれば純然たる紳士の風雅でありましたな」

清の言葉に、栄三郎も修次も、かつての「瀟洒会」の人々は、たった五年の間にあまりに語ることも多く、風雅にあそぶ心境でなくなつて久しいのを見た。そして仲間のなかには主義を異にして富山一派に廻つた者もいるのだった。会がしだいに政治集会と化すにつれ、どの寺も席をかさず、今はもっぱら本城邸か浅見邸が使われる。

もてなだけでは古くからの決まりにしたがって、酒三升、米三升、豆腐をもろぶた二箱、目黒鱒三百匁、あとは隨意である。

栄三郎はふっと次郎彦をみた。長男の安之丞だけは顎で使わない昔のくせが出て、酒はまだか、見てこいの意味であった。次郎彦も気軽に立って台所へ行ってみた。はなは、これから刺身にとりかかるところである。

ひさなら客が揃えば間髪をいれず刺身を出さだろうと、次郎彦ははなをせかした。

「母上、早うせんと」、すると、はなは、

「造りぐらいはすぐできます。それより、お酒が廻ると皆さまはつい声が高うなって、会合と言うと両隣へ気を兼ねます。

お前も、構えて激越なことばを吐くのではありませんよ」

と、前掛で手をふきながら彼を見上げた。

座敷では昌司が無愛想に答えていた。

「あの打試はなにもめでたくはないのです。この藩でもっとも威力のある大砲の射程が、わずか五百メートルなのです。実戦になれば、相手の甲鉄艦にとどく前に、向うの弾でもって当方の台場は粉砕されてしまいます」

「夷狄の砲はそれほど強力なのですか」

む、強力なものも……と、昌司は口籠って皆を見た。先日は海中の標的に発射したので盛大に水煙があがっただけのこと、弾といえば粗悪な火薬をつめた、砲といえば発射と同時に砲身が割れるような性能の代物で、皆は攘夷できると本気で信じている。

短気な佳蔵は一膝のりだし、

「ならば、昨年から長府藩が馬関に構築している前田砲台はどうじゃ。最新鋭の八十ポンド青銅砲を配すときいたが、これなら性能は夷狄に劣るまい」

「見たわけではないが、まあ、よろしかろう。ただし、馬関防衛には別の問題があります」

「と、いうと」

「馬関は皇国の咽喉部、ここを守る本来の目的は、夷船を瀬戸内に入れぬことにある。わが長州側が沿岸に砲台を築き、大口徑砲を配したところで、対岸の小笠原藩に攘夷する気がなければ、夷船は小笠原領海を航行して瀬戸内に入ることが可能です。二藩一致して挟撃するのではなくば、つまり、海防は藩単位では成立せんのです」

「小笠原藩が幕臣で攘夷する気がないとすれば、大口徑砲はますます必要であろう」
説明を求める声に昌司は刺身の皿をわきへよせ、畳に扇子で図を描いてみせた。

「詳しい弾道論は省くとして、馬関では約百メートルの断崖上に砲台を構築することになる。そこに巨砲を固定すれば、弾は海峡のこの範囲にとどくでありましょう。しかし、高所にある砲台は実戦には不利であり、相州でもわれわれ長州藩は、岬でなく丘陵地を選定したものです。クリミヤ戦役の折、トルコはダーダネルス海峡をのぞむ断崖上に堅牢無比の砲台を築き、巨砲を配して防備を誇りましたが、イギリス軍艦はいったんその死角に入ると、あとは悠々と砲台の真下を遊弋したと、夷書にも出ています。その例を以てすれば、いたずらに射程の長い巨砲よりむしろ中砲でよい、海岸線の屈曲を利用し、相互に死角を生ぜぬよう分散配置したほうが、理に適うのです」

のぞきこんでいる人々の頭ごしに、縁側の柱に背をもたせて次郎彦は昌司を観察していた。

この風采のあがらない四十男の昌司は、「勝手に藩を出ていった男」なのである。

二十五石取りの倅であったが、学問好きの彼は、萩・明倫館での一年間をおえると、すぐ江戸留学を希望した。だが、「輕輩の小倅に学問はいらぬ。そろばんでも弾けて勘定方下役に取りたてられれば出世ではないか」と一蹴され、そんならと十八才のとき大坂に出奔して齊藤鷺江塾に入ってしまった。

困った父親は、届けをだすには理由があるのだが、さて、なんとしたものか、知恵を絞って「倅儀よんどころ 抛なない用事之有、大坂へ出立申候間此段お届申上候」と書き、たちまち呼出しをくって、こっぴどく油を絞られたものである。

養子を迎えて家は安泰だったが、そのうち父親は死に、養子も実家へかえるという。堺で私塾を開いて齊藤塾に通っていた

昌司は、そこでいったん帰国し、妹夫婦に家督をつがせ、これからは漢学でなく蘭学の時代じゃ、とまた、佐久間修理太夫(号、象山)の門に入った。届けの理由など彼はすこしも悩まなかった、「私儀、今般掬ない用事之有、江戸表へ罷越候間」と、ぬけぬけと書いた。重役はおとなしい昌司の妹婿をよびつけ、「お上を蔑ろないがしにするのもええ加減にせえ」と、届けを丸めて投げつけた、とつたえられている。

「掬ない用事」で二十年余も藩を留守にしたその当の昌司は、一座の者の神経を逆撫するような発言をしたばかりであった。

「それは軽卒な独断です。われわれは三百年の泰平に馴れて、久しく実戦の体験をもちません、蛮夷などと侮っていは後悔しますぞ」

「それが、蘭学者の本音か」

「血気で攘夷はできぬ。相州でも、となりの川越、彦根両藩は、幕府の指示通り二十八門の砲を配備したが、海上から遠眼鏡でみれば物の役に立つのは五、六門のみにて、あとは間に合わせの飾り物で、こげ威ししようとする肚がみえすいておった、わが邦人は、金も時もないとの理由で、やつつけ仕事をして事足れりとする悪い癖があるのです。しかし、夷人にはそれは通用しませぬ。馬関でも前田砲台ごときをずらりと構築するなら話は別、前田一コをたのんで他を間に合わせですますなら、たぶんそうなるであろうが、馬関防衛は成り申さぬ」

聞き捨てならぬ暴言……と、酒の廻った一座の空気は、にわかに硬化してきた。

昌司は無表情に盃を干した。いつもこうであった、語れば語るほど断絶が生じる。

そもそも砲台とは、と昌司は、夷書でみた切石を積んで円形胸壁を作った堅牢無比の砲台の図をおもった。長府藩の設計者も、その形を進言したはずである。だが、いくら力説しようと、金も時もないと設計はしだいに手直し譲歩を余儀なくされ、ついには曖昧模糊とした砲台になるであろう。それが、原則に愚直なまでに忠実な夷人と小器用なわが邦人との差である。そんな砲台をたのんで攘夷を叫び、開国せざるを得なかった戦力の差を知らず、夷国の恫喝に屈したと開国策を非難する。おそ

るべき幸福な無智である。

昌司は飲み、飲むと憂鬱になった。

条約が締結され、相州には夷人の船員が上陸し、大地をとびはね、女とみればからかい、畑の作物をふみ荒らすようになった。ある日、大浦山へ迷いこんできた彼らは、台場をしげしげとみつめたが、やがて肩をすくめ、齒をむきだして笑った。そして、金髪赫面の仁王のような大男がいきなり六貫目砲に手をかけたとおもうと、目よりも高くさしあげて仲間の大喝采を浴びた。兵たちは齒軋りして口惜しがったが、昌司は「火の出るほど」恥ずかしかった。なぜ彼らがそれほど笑ったのか、現実には笑われるにしか値しないのを彼一人は理解していたからであった。

若い佳蔵と唯一はなおも食い下がった。

「さきほどから聞けば、お手前は攘夷は無謀、いや攘夷すれば負けると力説されておるように見受けられる。まこと、そう申されるのであるか、しかと返答されたい」

昌司は鉈豆煙管をぽん、ぽん、と叩いた。

「はい。しかともなにも、今戦えば負けますな」

「なんと。こやつ、夷人の手先じゃ」

「まあ、ききなさい。日本中の海岸の要衝に櫛比する砲台と巨砲なくば攘夷はできぬ。しかも砲台なるものは本来、守備のための城の如きもの、進んで敵を迎えうつ艦隊なくば戦にならぬ。よろしいか、わが邦の現状は、赤児が素手で戦を挑むも同然なのですぞ」

そのとき昌司のまわりで起こった声にならないどよめきには、殺気さえあった。

本城清は、ただもう憂わしげに顔をうつむけていた。温厚な彼は、議論がかならず感情の闘争にならずにはいられない人の性が嘆かわしくてならず、領内の孤兒、寡婦、病者およそ悩める者に手をさしのべずにはいられない聖人のような彼は、両袖をひらいて人々にいった。

「これまででいたそうではありませぬか」

突然、「異議あり、大いに異義あり」と、大声で清を遮って、ずかずかと上座に通ったのは、林芳雲であった。

栄三郎はあわてて一つしかない脇息を彼にゆずり、清は芳雲の蘭学嫌いをおもって眉をくもらせたが、次郎彦たち若者は、おもしろくなってきた、と期待にみちて芳雲に注目した。芳雲は澀みなく述べた。

「西学者は口をひらけば兵器の有無を論じるが、戦は兵器の数にあらざる。まして櫛比する巨砲と艦隊など、それひとえに怯懦をかくさんとする詭弁である」

「昔から、国に三年の蓄えなくば国にあらざる、という。戦国の世には一萬石の封土につき、それに見合う戦士と兵器の数が規定されていたが、われわれは今、泰平になれて満足な兵器ももたぬではありませんか」

「では、その兵器、なんとして作る」

「しごく、かんたんであります。諸侯みなその租の半ば以上を参府のために消耗するのが実状、もし参府を取りやめるとすれば、その道中費用と江戸滞在費をもって砲台も巨砲も成りましょう。さらに奥向きも国許へ引きあげるとすれば、江戸郵費用をもって、十年たたぬうちに沿岸に艦隊を浮かべるのも不可能ではないはずす」

その説には賛同者も多かった。

それをみて、芳雲は一転して論を「西学」の本質に転じた。

「かねて質したいとおもうていたが、今宵はよい折じゃ。なんじゃな、西学の人倫の根本は、男と女である、とは、まことか。夫婦の道、雌雄の道が根本とすれば禽獸に同じ、忠孝の道も五倫の道もないのか。君臣も義でなく、友情で結ばれるときいたぞ」

「漢土に漢人の倫理のあるごとく、西洋にも、夫婦の道のほか君臣の道も長幼の序もあります。聖賢の道も治国経世の書もあり、われわれとなんら変わりませぬ」

「だが、西洋の道なるものは形名功利の卑しい道であろう」

「それは見解の相違であります。漢学者が漢学を万能とし、漢の習俗を無上のものとみなし、他学の所見を異端視するは狭量のなせるところ、国学者もまた、然りです。およそどの学にも長所と短所はある。それを認めずして徒に他を攻撃し相争う図は、国を誤まるものといわねばなりません」

「さて、度しがたいのは、漢学者よりさらに西学者である」

二人の論争は、台所の板の間へべったり坐りこんでいるはなの耳にも響きわたって、両隣とも、なにごと、と耳をそばだてているにちがいない、難儀なことじゃ、とはなは溜め息をついた。

「そちら西学者は口を開けば、西洋の文物制度の燦然を説き、その是非もとわず本邦の制度、礼俗のすべてを西洋風に変えんとするが、それこそ、人を誤まり国を誤まる所行である」

「良所を探るになんの躊躇がいらましようや。西洋の文物制度にみるべきもの多く、福祉についても、貧者のために貧院があり、病者に無料の施術があり、寡婦孤児を收容し技術を習得させる施設もあります。人民の納める税はその禄の十分の一をこえず、それはわれらにとって……」

「そこじゃ。夷人は深謀遠慮、清国を侵すに宗教とアヘンを以てしたが、わが邦へは利を以て誘うのじゃ。幕府の連年の悪政のためわれらみな貧しく、争って利に転ぶ。きけば下田の無智なる町民どもは夷人の雑用をして小銭を得、アメリカさまと奉って恥も外聞もない、という。江戸も衰弱弛緩しておるゆえ今に江戸もあげて下田の愚民のように相成り、さらには日本中、利に奔るであろう。そしてそのためには夷服を着し、夷礼を行い、道といえは男女の道、禽獣の道のみを欣々然と奉ずるようになるであろう。その行く末の見えぬのは、そちら西学者、夷人の手先のみである」

芳雲は滔々と述べて倦まなかった。いつか佳蔵や唯一の姿はなく、そして芳雲がこの会合にやってきた本来の目的、昌司の西洋流練兵の迂愚について西欧の広大な山野とわが邦の狭小な地形との相違から説きおこすころには、めざす昌司の姿も眼前になく、のこされた盃に縞蚊の死骸がういているばかりであった。

昌司の忘れていった道具をもって、次郎彦はあとを追った。夜は深く、狭い空をぎっしり埋めた星の一つ一つが瞬き、声

をかぎりに自己主張するようにみえた。狭い徳山では星まで多弁、もはや議論はききあきた、実行あるのみ、と次郎彦はあるいていった。

御弓丁西から数えて三番邸、樗の大樹の下の邸では行灯に火が入ったばかりであった。熊谷主税が切腹し、娘そのが行方しれずとなつて長らく空いていたこの邸では、ふつう戸口から洩れる灯影が、壁の隙間、障子の破れ目など、あちこちから洩れている。式台から声をかけると、箸箱ほど細長い奥から、大きな影法師がゆらゆらとゆれてきた。

眞道具をわたし、あまりな荒れように「奥方はご病氣でありますか」と問うと「妻などもちませぬ」と、膠もない。

「うむ。蘭学ちゅうものは、それほど面白いものではありませんか」

「知識欲ほど貪婪なものはありません」

あなたは若くそんな良い体格だから勉学も捗るだろう、若いうちに勉学せねばならぬ、江戸や上方には対坐しただけで震えるような凄い人材がいくらでもいる、と三十八才の昌司は次郎彦の巨体をじろじろとみて妬みの色を走らせると、

「では、ごめん。このところ『ユイスキコンテ』の著述で忙しいのです」

びしゃり、と式台の破れ障子をしめた。

ユイスキコンテ……田舎侍の昌司の唇から沁りてた流暢で美しい発音をきいたとき、一瞬ではあったが未知の国の扉がひらき、異国の香りにみちた燦然とした世界を垣間みたようで、次郎彦は眩惑されてしまった。

ユイスキコンテ。昌司が当然のように口にした単語がなんなのか、彼には皆目見当もつかなかった。蘭学のみでなく、漢学も国学も彼はなに一つ究めず、彼の知らぬ多くの世界をなに一つ体験しなかった。十九年の生涯で自分は何を知り、なにを体験したか。十一月決起に身を投じようとする自分は、途方もない誤りを犯そうとしているのではないか。呆然と佇っている彼の肩を、樗の早い落葉が一枚、ひらり、と搏った。彼は眉をあげ、後悔に似た心のゆらぎを振り落した。

本丁近く、向こうから一散に走ってくる人影があった。

「おい、佳蔵ではないか」

「おう、嚴之丞、よいところで。一大事だぞ、京で、ただならぬ変事がおきている」

「ただならぬ変事とは、なんだ」

「大獄じゃ。儒者、浪人、公卿の家臣まで一網打尽になっていると。しかも日を逐うて規模を大きくしているらしい。それを指揮するのが、例の上落した、間部まなべしよまのから下総守」

間部下総守、それこそ、十一月決起の目標人物であった。だれに聞いた、といきなり駆けだそうとする次郎彦の袖をしっかり掴んで佳蔵は首をふった。

「江戸も京も、同志は散りぢりに潜伏してしもうた。待っても連絡の来なんだはず、企ては、とっくに御破算になっていたのじゃ」

(作文同人)

名古屋 哲夫

〒六〇三―八二二五
京都市北区紫野下門前町五

渡辺 利喜子

〒一九〇―〇〇〇三
立川市栄町一―二五―九

秋原 勝二

〒二四九―〇〇〇二
逗子市山の根三―十一―二五 渡辺方

次集

第二〇六集 原稿ノ切日

平成二五年四月末日

(平成二五年七月一日発行予定)

作文第205集 (頒価一、〇〇〇円)

発行日 二〇二三年一月一日

編集

秋原 勝二

発行人

発行所 (〒二四九―〇〇〇二)

逗子市山の根三―十一―二五 渡辺方

作文社

電話 〇四六―八七―一五七三

振替口座

〇〇一九〇―九―六八九二五

印刷所 (〒七〇三―八三三三)

岡山市中区高屋一―六―七

株式会社 三門印刷所

電話 〇八六―二七三―〇五五〇代